

芝居番附 七種

付、松屋来ルのこと

柏崎 順子

一

周知のように歌舞伎の発祥は京都にその地を求めることができる。中世以来、京都の河原筋や境内では勸進能をはじめとして、さまざまな雑芸が繰り広げられていた。そして四條河原の地で「元和年中、時の御奉行七ヶの矢倉を赦し給ふ」(『歌舞伎事始』)ことがあって、芝居興行は公的な保護を受けることになる。これを契機として他の諸々の芸能もこの地に集まりはじめ、四條河原は股賑をきわめることになる。しかし保護なるものは監視と表裏一体のものであり、事実、その後遊女歌舞伎の禁止(寛永六年)、若衆歌舞伎の禁止(承応元年)等、興行への干渉は続いた。若衆歌舞伎禁令の翌年、「承応二巳年にいたり、そのときの御奉行、祇園御参詣の節、村山又兵衛、御駕訴訟に付、芝居御赦免の御願ひ申上、御役所まで付したひ、御歎き申上けれど、御免なかりし故、御役所の軒の下にききふし、雨露にうたれ、着類はかまも破れ損じ、瘦おとろへて、人のかたちもなかりける。弟子の子供役者、食物をはこびて又兵衛をはこくみしが時ありて同年三

月に物まね狂言づくしと名目あらたまり、御赦免ありしより、今に相統す」(『歌舞妓事始』)といった事情も伝えられ、芝居関係者の動揺と懇願があつて興行再開の運びとなる。その後寛文年間には一時興行の記録が姿を消すが、同八年頃には演劇としての要素を備えた傾城買いの狂言が行なわれている(『芸かがみ』)。この歩みはやがて坂田藤十郎や芳沢あやめといった優れた役者を擁した元祿歌舞伎という頂点に達し、和事や女方の芸が生れ、高度な演技術を展開することになる。正徳三年(一七一四)の『四条河原諸名代改帳』によれば、その頃名代を有していた芸能は歌舞妓、物真似、舞、からくり、浄瑠璃、説経に及んでおり、興行がかなり体制下で行なわれるようになっていたことがうかがわれる。

一方、操り浄瑠璃では宇治加賀掾と竹本義太夫が出て、古浄瑠璃とは一線を画する作品のもとに新たな展開をみせる。かさねて義太夫と近松の提携も成り、こちらからも活況を呈してくるのである。こうした動静の中、歌舞伎と浄瑠璃は相互交渉の著しい時期を経て、やがて「かぶきはしたれどもなきが如し」(『浄瑠璃譜』)とうたわれた状態に淘汰されていく。このような期に際し歌舞伎が再生の道を探して試行錯誤をくり返している様子が当時の記録に散見している。諏訪春雄氏がとりあげられた「寛保鶴井京七座事件」⁽¹⁾等もその一端であろう。これは歌舞伎界の低迷の様が興行上の問題となつて顕れた事件であるが、ここではある年の京劇壇の役者や作者の動静に焦点をあてて、その試行のひとつを紹介することにする。

二

明和五年二月十六日から京都四條通南側芝居市山助五郎座では、二の替り狂言として「けいせい桃山錦」が出た。『並木正三代噺』には「明和五年子年春は京都中山文七より頼まれスケに登り、二のかはりけいせい桃山錦を出し」とあることから並木正三がこの狂言に携わったことがうかがわれるが、番附の作者連名には表れない(参考7)。

かわりに作者連名に「松屋来ル」という作者がみられる。これは作者の名を記述した固有名詞ともとれるし、松屋某という作者がこの年山下市山座へ出勤していることを強調した記述と考えることもできる。しかし後者に関しては、延享、享保、元文頃の極番附には京都以外からの出勤者に関して「江戸敵役」「大坂太夫」「大坂狂言作者」などという記述方はなされているが、「松屋来ル」のように表現された例は見あたらない。

この作者は明和四年の顔見せ『神勅壽鐵砧』から番附に名を連ね、明和五年秋までの一年間のみ名目をあらわしている。⁽³⁾ その前後には大坂にもあらわれず、もちろん江戸にも見あたらない。しかし番附の記載は他の作者より大きく太くあらわれているので、この年の山下市山座の作者の中で強調されている作者とみてとれる。この人物について考察してみることとする。

三

この頃の上方歌舞伎界において「松屋来ル」と名乗る作者を見出すことはできない。寛延三年（一七五〇）刊の『新撰古今役者大全』の「狂言作者の事」に「上がたの作者、並木、松屋を名乗るもの多し。^{おま}松屋は惣助家名のよし也」とあるが、実際寛延前後の番附の作者連名で確認できるのは管見では松屋来助（久右衛門）、松屋幸助、松屋勇助、松屋利助の四名である。松屋来助については杉下多美氏が詳察しておられ、それによって元文から寛延にかけて大坂で活躍した作者であることが明らかとなっている。松屋勇助、幸助、利助に関しては来助と共に名をあらわす例が多いこと、またその配置等から推して来助の門弟格ではないかと思われる。しかしこの三人に関しては他に資料を見出すことができなかつたので、とりあえず松屋来助の周辺を検討してみる。

松屋来助は番附には享保十七年閏五月十七日大坂中の芝居「河州内助淵」に津打来助として登場し、以後寛延元年まで

は大坂歌舞伎界で揺るぎない地位を保っている。寛延二、三年は所在が不明となるが、宝暦元年再び京都、都半太夫座にあらわれ、その後の消息を絶つのである（杉下氏前掲論文）。

この来助には三人の子どもがおり、これが歌舞伎役者、松屋門十郎、中山文七、中山来助である。三人共に立役中山新九郎の養子となり、同じく立役としてそれぞれ舞台で名を馳せている。なかでも中山文七は座本もよく勤め、一時期前の浄瑠璃全盛時代を経てようやく歌舞伎が再び活性化し始めた頃の芝居界を支え得た大立者の一人である。

この文七が大坂角の芝居で座本となり「恋女房染分手綱」を上演中、一騒動が持ちあがり、文七は「お預け」になるという事件があった。この事件に関しては『明和雑記』に詳しい。

角の芝居騒動落着芝居がりの事

去酉年道頓堀角の芝居座元中山文七相つとめ諸人の気請能殊の外繁昌にして毎日見物大入なり時に御城内中間五六人見物に來り場所の事につきていひあひあがり口論なりしが外よりもあいさつにて事濟皆々帰りけるに壹貳町も過つると些細なことから端を發して御番頭の怒りをかうことになり、とうとう奉行所まで乗り出す騒ぎとなり、「右一件糺しありて四月六日いづれも召出され座元文七は名代召上られ過料仰付られ木戸は町拂ひ大手連中は別條なく御免廿貳人の中間は追放仰付らる壹ヶ年餘におよびて落着せしなり」ということになる。この間、角の芝居へ出勤していた役者たちは急場の策として中座へ赴き二軒分の役者をひとつにして顔見せが行なわれた。しかし各座にはそれぞれ立者がいるため、角座の幹部役者は所を得ず、不入であったあやつり芝居若太夫座で文七の子息、姉川菊八を座本として顔見せが行なわれている。十一月十一日より『花櫛聞書太平記』が興行され、二の替り『大和國井出下紐』と共に「殊の外繁昌」（『明和雑記』）

という成果をあげた。文七は四月十五日より姉川座ではじまった『夏祭浪花鑑』から復帰することになり、続いての八月

廿八日からの『仮名手本忠臣蔵』で初めて由良之助役を演じている（参考1）。『中山文七一代狂言記』でこの時の由良之介を、「城わたしのまく切より、一力の場場の鏗音文の見やうなど都てゆらの助にこまかい仕内の初りしは、凡そこの人がはじめかと存る」と伝えている。

由良之介といえはその年、初世尾上菊五郎が廿五年ぶりに上京し、上方芝居界を賑わしているが、これも江戸暇乞に市村座で初めて由良之助を演じている。軌を一にして東西の大立物が由良之介役をつとめており、しかも両者は明和三年、山下山座の顔見せで同座する運びとなる。十一月二日から幕が開いた。狂言は上中下で構成され、文七は中の「月夕金玉浪花壽」で新兵衛役となり、菊五郎は下の「花曙入船吾妻海」で片桐武者之助となった。この時の両者に対する評は「中山文七一代狂言記」に周囲の状況も読み込んだかたちでうまく言い尽くされている。

明和五年いとは、京都山下座へ菊五郎と同座のつとめ、鬨の紋のほうかぶり出ておとはやの先生が登られたで、さしもの宇治屋もうぢくで有た、スキいやかほみせの櫻井新兵衛、仕内は随分よけれども、何が此六七年、大坂にてあたりつゞけの此人、どのやうなもの早う見たひくとまちかねて、評判過たのと、菊五郎は前の噂、夫ほどになうて見た所花やかに、所の気に叶ひたるに、内のり外のりの違ひが御さるで、スイカクソりや大佛は、大い物とおぼへて、初めて見たときにおもふたほどにないと同じ事さ、大せいきつとく、鬨組何でもきく五郎におされ、よしもあしをで有った。

要は蓋を開けてみると菊五郎の方が評判が良く、人々は「当顔見世の大入は此人をめざし」（『役者巡炭』）たということなのである。

文七は前年の騒動後の復帰という話題の人であり前評判が高かったのに対し菊五郎はそれ程でもなかったのが、実際上演後の芸評には逆効果となって現われたわけである。

世評は右のようなかたちに落ちついているが興行側での両者の位置付けはどのようになされていたのだろうか。

上方の芝居界は興行機構に特徴があり江戸のように座元に権勢が集中していたのとは事情が異なる。即ち興行権の所有者である名代と興行師の性格を持つ座本、劇場の所有者である芝居主の三者によって興行が支えられていた。これらはそれぞれ番附に記載される位置が定まっている。芝居主は番附にあらわれないが、名代と座本は京都の番附の場合、最初の部分に定紋を頭にいただき名代と座本が並び、名代や座本が複数の場合は上下に二分してそれぞれに分けて記載されている。座本は役人替名の次第の最後に位置し、替名と役者名の間小さく「座本」と記述してある。その座本の右隣りが座頭の位置である。役人替名が上下二段に渡っている番附では上段の座本の右隣りが座頭脇、下段の座本の右隣りが座頭の位置である。⁶⁾

この法則で明和四年一年間の山中市山座の番附をみると、まず顔見せであるが、これは所在不明で確認できない。二の替りは正月十六日から「けいせい大内櫻」が上演されるがこの番附⁷⁾では文七は上段の座本の右隣り、即ち座頭脇であり下段の座頭には菊五郎が座っている。続いて三の替り三月十五日よりの「物ぐさ太郎」〈参考2〉では文七が座頭、菊五郎が座頭脇へと立場が逆転する。以下五月十八日からの「一谷嫩軍記」〈参考3〉は菊五郎が座頭、『歌舞伎年表』には欠落しているが七月十五日からは「謔倍福茶釜由来」〈参考4〉の番附が残っており、その時は文七が座頭、九月九日からの「楠木正行軍略之巻」〈参考5〉は同じく文七が座頭となっている。一年間で座頭役を両者がほぼ二分して勤めたかたちとなっている。東西の大立者の同座ということへの配慮であろう。興行側としては二人を同格に扱っている。

こうして一年間の同座の後、文七は山中市山座へ居なりとなり、菊五郎は北側芝居の尾上座に出勤となる。菊五郎が抜けた山中市山座では大坂から文七の父中山新九郎を呼んで顔見せに臨んでいる。

この頃は宝暦期に大和大路の芝居小屋がなくなつてから元禄期に七軒あった芝居小屋はわずか三軒を残すのみとなつて

おり、しかも北側芝居のひとつは実際は人形浄瑠璃の芝居がかかっていた。つまり京都における歌舞伎大芝居は二軒が競立していた状態であり、それらの小屋は目と鼻の先に位置しているため両座の、ひいては役者の人気の具合は一目瞭然であったろう。文七としてはここで山下乡山座が劣勢となれば前年にひき続いて面目をつぶすことになる。実際顔見せの段階では北側に押されぎみだったのではないだろうか。明和五年の評判記『役者當紫選』では中山文七評で「此度はさしてお役もなければ春はしつぱりとした仕内をまちます〜」と頭取に言わせている。前述のように二の替り狂言には大坂から並木正三がスケに入るが「並木正三一代斬」では文七の要請があつて正三の山下乡山座入りとなったことを伝えている。この時の狂言「けいせい桃山錦」の番附を見ると、狂言作者が名を連ねた後、頭取記述の前に一行分余白があり、その下の方に文字らしきものがかすかに残っている。正三の名があらわれていないが、あるいは何らかの事情でこの部分の名を削ったのかもしれない。

因みに明和五年に蕪村が『顔見せ』という俳文で菊五郎について触れている。

梅幸は優伎の英雄なり。そも〜大石が精忠、日本が節義、能、二士が肝腸を探りて其志気にせまる。見るもの左に
 袒ぎ毛髪を空にす。訥子、薪水再生すとも三舎を避べし。―以下省略―（『俳文学大系』による）

十一月四日、田福亭における句筵の詞書であり、この日から南側芝居中村座では『葩花操太平記』が大坂から富十郎も迎えて幕を開けている。この顔見せを観た後の一文であり、蕪村が菊五郎の芸の冴えに感嘆している様子をうかがうことができる。蕪村は安永八年一月二十五日付の几董宛と推定される書簡の中では「先ツよし男一人外に見ルものハ無之候」と由男、つまり文七を評しており、明和五年の菊五郎の賞讃は個人的鼻屎によるものではないといえよう。こうした菊五郎の好評に対し、文七は同年十月九日から暇乞狂言を勤め、父新九郎と共に大坂へ戻っている。この時の上京は不成功に終わったのである。

このように文七が苦しい状況の時に同座にあらわれるのが「松屋来ル」という作者なのである。杉下氏によれば享保期から中山新九郎、中村十藏等の役者と一体となって、パターン化した配役のもとに新作狂言が創り出されていったわけでその担い手が文七の実父、松屋来助であった。来助は宝暦元年には姿を消してしまふ作者であるが、実子の苦境にこの一年に限って再び復帰したと考えられなくもない。

しかし、もしこのような事情があったとしたら評判記や役者の一代記等が触れていそうなものだが、それらしき記述は見あたらない。しかも劇界から消えて十八年の歳月が経っているので没している可能性も大きい。安永六年の正月に出版された『新版整入当世芝居氣質』に、狂言づくりをしている滝田治藏という男のもとに並木宗輔等と共に松屋来介が人だまとなつてあらわれる件りがあることから、この時点では没しているのではないかと推定される。ただ明和四年十一月の山下市山座の顔見せ「神勅壽鐵砧」は番附を確認できず、台帳も発見されていないが『歌舞伎年表』には作者として「松屋来」の名があり、『国書総目録』では「松屋来助」と明記している。何らかの資料が存在したと考えられるが今は推測の域を出ないのである。二の替り「けいせい桃山錦」は台帳が現在四部、所在が明らかとなつているが、いづれも作者の記名はない。以上のことから、文七と関係のある松屋来助をもつた単なる賑やかしという可能性も強くなってくる。

その他、この作者と考えられる人物は来助の実子、中山来助である。『戯財録』では「中興役者に作意ある分」として中山来助の名があげられている。中山文七は実兄であり、古くは松屋来助と名のつたこともあるので、この時作者として文七を助けたとしてもおかしくないが、明和五年は大坂角の芝居に役者として出勤しているため、中山来助と考えるのも無理がある。松屋来助の、あるいは並木門の作者の一人であろうか。結局この作者については不明と言わざるを得ない。

四

以上、中山文七が立者として活躍し始め、評判記における位付も最上位の部類に位置するようになってきた明和年中、京都での菊五郎との競演の周辺を概観してみた。

江戸芝居の興行形態は固定した座が存在し頭取は世襲的に特定の家柄が受け継ぎ、同時に興行権も所持しているという事情に対し、上方は権限が分化し、その組合わせによって毎年一座が再編成されていた。このため明和五年度の京都の芝居のような動きが生じたのである。この頃の京都は実質的には役者にしろ狂言にしろ大坂の芝居界の力を借りて、辛うじて成立している状況であった。浄瑠璃全盛時代の次期にあって歌舞伎が体勢を立て直そうとしてさまざまな試みがなされた中のひとつとして菊五郎と文七の競演が企てられたのだろう。実際、この企画は興行面からみれば大成功であった。明和四年の評判記『役者巡炭』の菊五郎評の中で「此事の貞見せ程いさましい事は近年覚えませぬ。内が残らず棧敷故、扱々花々しき賑ひでござりました」というように芝居街は久しぶりに沸いたのである。また、はじめ浄瑠璃作者であった並木正三が歌舞伎にも携わるようになり、やがて歌舞伎作者の第一人者となっていく。明和期はちょうど油ののりきった時期であった。正三によって漸新な仕組や舞台機構を駆使した狂言が次々と生み出されている。浄瑠璃作者出身であった正三故の発想が功を奏しているところ多大であるが歌舞伎も自身の創造性をとり戻し始めているのである。

もし明和五年の狂言作者「松屋来ル」が松屋来助であるとすれば、一時期前の立作者の力をも借りて興行を成功させようとする苦肉の策と受けとめられよう。また別の人物、もしくは架空の人物だとしても、この年の市山座の関係者の苦心の程をうかがい知ることができる。依然、浄瑠璃をそのまま歌舞伎へ移した上演も多い中、こうした動きの中に歌舞伎の自立への努力を垣間見ることができるのである。

〈注〉

(1) 諏訪春雄『元禄歌舞伎の研究』(笠間書院) 所収
(2) 「神勅壽鐵砧」の番附未見。『歌舞伎年表』では作者として根本蔵作や末広与一と共に「松屋来^(マヤ)」とある。十一月二十五日から替り狂言「祇園祭禮信仰記」がはじまるが、この番附へ参考6)にも「松屋来ル」とあることから、この人物は顔見せから出勤しているのはまちがいないと思われる。

(3) 明和五年の京南側芝居の附作者連名は

○明和四年十一月四日「神勅壽鐵砧」

未見。『歌舞伎年表』『国書総目録』によると作者は

根本蔵作

松屋来

末広與一

○明和四年十一月二十五日

「祇園祭禮信仰記」実践女子大学所蔵

狂言作者 根本蔵作

坂田しゆん蔵

松屋来ル

扇屋正次

末広与一

○明和五年二月十六日「けいせい桃山錦」

実践女子大学所蔵

狂言作者 根本蔵作

坂田俊蔵

松屋来ル

末廣与一

○明和五年五月六日「義経腰越状」

東京大学国文学研究所蔵

狂言作者 根本茂作

坂田俊蔵

松屋来ル

扇屋正次

末広与市

(4) 「狂言作者松屋来助」杉下多美(『演劇学』23、昭和五十七年三月)

(5) 『新刻役者綱目』○中山ノ系つづに三人の役者が掲られ「右三人兄弟にて実ハ狂言作者松屋来介子なり」と注記がある。その他それぞれ
の役者の説明の箇所等にもその旨の叙述がある。

(6) 『戯財録』「役者番附の事」に従った。

(7) 東京大学国文学研究所蔵

(8) 東京大学国語研究室所蔵四冊

同 三冊

京都大学附属図書館所蔵三冊

阪急学園池田文庫所蔵二冊

<p>子秋菊歌楽可 芝居番付七種</p>	<p>三味線 大西廣波布</p>
<p>取取 中山政部</p>	<p>上乃り 豊行梅文</p>
<p>大川為海 大川中 大川外</p>	<p>中乃り 中乃り</p>
<p>大川中 大川外 大川内</p>	<p>中乃り 中乃り</p>



豊新

物 ぐ さ 太 郎

やくしやかへ なの次第

たかとみ久よし 市山 助五郎

かんぬしうねめ 坂東 平五郎

みだいゆふし御ぜん あらし此松

さこんのしん 上むら松藏

よし丸ぎみ 柳山 松之介

こ と み 沢村 秀次郎

座頭すがいち 浦山 七五郎

やつこいせ介 柳山 伴藏

きん八娘小みつ 中山 与三郎

いせしん九郎 あらし藤十郎

あしや姫 尾上 久米助

ふるいち市兵へ 中村 吉十郎

はせべうんこく 大谷友右衛門

よしかた 小川 吉太郎

やつこおか平 おのへ新七

みやぎの 桐のや秀松

さへだ 山下 金作

いのくまもん平 浅尾 為十郎

しがらみ 中村久米太郎

らうにん伴さく 尾上 菊五郎

やまがたやおさの 歴本 山下 京之助

浄 り 豊竹和歌太夫

同 さみせん 豊竹 園太夫

頭 取 天瀧屋 久七

明和四年亥三月十五日より

名代 早 雲 長 太 夫

加藤 まさはる 松屋 七郎

あげや才兵へ 中村 滝藏

でつち長吉 中村 吉之介

とこよし 中村 吉右衛門

こよし 山下 乙吉

あげや曾平 あらし八五郎

いぬがみだん八 市川 升藏

なかふどぜん五郎 山下 治藏

床やとち兵へ 山下 治藏

草り取秀藏 藤川 山吾

歌の介妹なでしこ 柳山 千きく

いしづかげんば 大谷友右衛門

なごやさんぎ 尾上 新七

うたのすけ 小川 吉太郎

きんぎよや金八 尾上 紋太郎

かづらき 山下 金作

おくに御ぜん 中村久米太郎

物ぐさ太郎 中山 文七

山三母みなせ 歴本 市山 助五郎

右の外座中不殘罷出申候

天瀧屋 久七 扇谷 林藏

狂言作者 天野 利助

待田 惣藏 藤川 山八

頭 取 松屋 新十郎

板元 いつみや又兵衛

の紙字の末二月十五日

次敷 天徳盛久七

芝竹 松屋久七

物次大席 役 墨雲長美

<p>一 谷 嫩 軍 記</p>	<p>名 代 早 雲 長 太 夫</p>
<p>やくしやかへなの次第</p>	<p>つゝきやくしやかへなの次第</p>
<p>市川升藏 なるりた五郎 柳山伴藏 山下治藏 さめがい兵太<small>ニヤク</small>柳山伴藏 中村吉之介 すのまたぐん平<small>ニヤク</small>山下次藏 中山与三郎 かぢはら平次<small>ニヤク</small>市川升藏 尾上久米助 たいこもち惣介 あらし八五郎 嵐藤十郎 同 喜六 浦山七五郎 市山助五郎 つぼね 上むら松藏 小川吉太郎 こしもとたがそで 山下音吉 尾上紋太郎 うれらば 沢村秀次郎 桐山紋次郎 石や下女おいわ 藤川山吾 大谷友右衛門 きやらのきみ 嵐 世代松 榊山千きく あつもあり <small>ニヤク</small>尾上久米助 大谷友右衛門 うつのや七郎 中村吉十郎 小川吉太郎 小川吉太郎 桐の谷秀松 源のよしつね 小川吉太郎 尾上新七 玉おり姫 山下金作 ははやし 天満屋久七 たご平 浅尾為十郎 庄やまご作 尾上紋次 こだ六 <small>ニヤク</small>浅尾為十郎 平のときたゞ 尾上新七 さかみ み 中村久米太郎 たゞのり 尾上紋次郎 くまがへの次郎 中山文七 七きくのまへ<small>ニヤク</small>山下金作 平のつねもり 市山助五郎 けいせいすがはら <small>ニヤク</small>中村久米太郎 茂次兵へ 豊本<small>ニヤク</small>市山助五郎 おかべの六弥太 尾上菊五郎 そめぎぬ 豊本山下京之助 右之外座中不残罷出申候</p>	<p>市川升藏 なるりた五郎 柳山伴藏 山下治藏 さめがい兵太<small>ニヤク</small>柳山伴藏 中村吉之介 すのまたぐん平<small>ニヤク</small>山下次藏 中山与三郎 かぢはら平次<small>ニヤク</small>市川升藏 尾上久米助 たいこもち惣介 あらし八五郎 嵐藤十郎 同 喜六 浦山七五郎 市山助五郎 つぼね 上むら松藏 小川吉太郎 こしもとたがそで 山下音吉 尾上紋太郎 うれらば 沢村秀次郎 桐山紋次郎 石や下女おいわ 藤川山吾 大谷友右衛門 きやらのきみ 嵐 世代松 榊山千きく あつもあり <small>ニヤク</small>尾上久米助 大谷友右衛門 うつのや七郎 中村吉十郎 小川吉太郎 小川吉太郎 桐の谷秀松 源のよしつね 小川吉太郎 尾上新七 玉おり姫 山下金作 ははやし 天満屋久七 たご平 浅尾為十郎 庄やまご作 尾上紋次 こだ六 <small>ニヤク</small>浅尾為十郎 平のときたゞ 尾上新七 さかみ み 中村久米太郎 たゞのり 尾上紋次郎 くまがへの次郎 中山文七 七きくのまへ<small>ニヤク</small>山下金作 平のつねもり 市山助五郎 けいせいすがはら <small>ニヤク</small>中村久米太郎 茂次兵へ 豊本<small>ニヤク</small>市山助五郎 おかべの六弥太 尾上菊五郎 そめぎぬ 豊本山下京之助 右之外座中不残罷出申候</p>
<p>浄留理 豊竹和歌太夫 豊竹園太夫 竹沢岡五郎 三味線 頭取 天満屋久七 明和四年亥五月十八日より</p>	<p>浄留理 豊竹和歌太夫 豊竹園太夫 竹沢岡五郎 三味線 頭取 天満屋久七 明和四年亥五月十八日より</p>
<p>板元 いつみや又兵衛 頭取 松屋新十郎 狂言作者 待田惣藏 扇屋林藏 天満屋久七</p>	<p>板元 いつみや又兵衛 頭取 松屋新十郎 狂言作者 待田惣藏 扇屋林藏 天満屋久七</p>

<p>謔倍福茶釜由来</p> <p>名代早雲長太夫</p>	<p>やくしやかへの次第</p> <p>いわき又市 ちうげんもり介 こしもといしだ 与五郎娘おひで かみくずかい長兵へ たけばやし後室 よこづち伴内 まいこゆか 隼人娘おてる さたやおくめ あら川文平 さたけ郷右衛門 けいこいるか やりてすき 山の江しやうげん 竹ばやし大かく ながらの武兵へ いわき十内 よ介妹おなみ 若たう庄介 竹林馬之介 明和四年亥七月十五日より</p> <p>松屋新十郎 中村たき蔵か 山下乙吉うばおさと 中村吉之介与五郎子市松 坂東文五郎さるふり喜兵へ 市川升蔵海部や半四郎 山下治蔵下女つね 中山与三郎道しんじやさいねん あらし八五郎 かねかし義平 尾上久米助きも入利八 中村吉十郎さぎや清左衛門 大谷友右衛門さたけ要介 柳山千きく武兵へ女房おなを 桐の谷秀松ながらのお峯 嵐藤十郎とくだ隼人 桐山紋次与五郎女房さきし 浅尾為十郎山の江しづま 尾上紋太郎くつお番頭新介 中村久米太郎よめおかね 尾上菊五郎浅井与五郎 堅^堅市山助五郎つくば姫 右之外座中不殘罷出申候</p> <p>下男喜八 市山助五郎 藤川山吾 上むら松蔵 三升次郎吉 坂東平五郎 浦山七五郎 沢村秀次郎 あらし八五郎 柳山伴蔵 山下治蔵 中村たき蔵 中村吉之介 与五郎子市松 さるふり喜兵へ 海部や半四郎 山下治蔵 下女つね 道しんじやさいねん かねかし義平 尾上久米助 きも入利八 さぎや清左衛門 大谷友右衛門 さたけ要介 柳山千きく 武兵へ女房おなを 桐の谷秀松 ながらのお峯 嵐藤十郎 とくだ隼人 桐山紋次 与五郎女房さきし 山下金作 小川吉太郎 小川吉太郎 くつお番頭新介 小川吉太郎 よめおかね 中村久米太郎 尾上菊五郎 浅井与五郎 つくば姫 堅^堅市山助五郎 右之外座中不殘罷出申候</p> <p>狂言作者 扇谷林蔵 待田惣蔵 天野井理介 藤川山八 松屋新十郎</p> <p>頭取 板元いつみや又兵衛</p>
-------------------------------	--

<p>楠正行軍略之卷</p>	<p>うへすぎだんじやう けん恵ほうあん しぎでん八 やをかん六 おんぢぎ五郎 わたしん平 ちうけん芋助 あみうち浦七 うはしがらみ てだい銀介<small>ニヤク</small>浦山七五郎 ぐそくや藤兵へ くろづか文内 やまぶきの秀藏 くろづか源内 おおはし おせしん<small>ニヤク</small>桐の谷秀松 ほそ川より行 あらし藤十郎 秋しの よせなみ<small>ニヤク</small>山下金作 石だう子花石 たいこ作次 ぢじゆうの介<small>ニヤク</small>小川吉太郎 うぢの良介 紅梅やお梅<small>原本</small>山下京之助</p>
<p>代名 早雲長太夫</p>	<p>なをよし 御だい山城御ぜん とせうしめのみ介 同竹の丞 けいせいむさしの くつは才兵へ おはし娘おきく はやみせ平 山名かん太夫 やつこかん平 みゆき ちかつか もろやす<small>ニヤク</small>山下次藏 おとこだて半六 やつかち藏<small>ニヤク</small>大谷友右衛門 やつこてる平 尾上新七 男立あらハ くすの木正行 尾上紋治 夢はんじ在兵へ 石だう大ぜん<small>ニヤク</small>浅尾為十郎 はずへ姫 中村久米太郎 けいせい玉の井<small>ニヤク</small>中村久米太郎 はね川しゆぜん 中山文七 母いそへ<small>原本</small>ニヤク市山助五郎 右之外座中不残罷出申候</p>
<p>狂言作者</p>	<p>扇谷林藏 待田惣藏 天野井理介 藤川山八 頭取 天瀧屋久七 いつみや又兵衛板</p>
<p>上るり</p>	<p>豊竹和歌大夫 豊竹園大夫 三味せん 頭取 松屋新十郎 明和四年亥ノ九月九日より</p>

<p>名代早雲長太夫 座本市山助五郎</p>	<p>こにし弥次郎<small>四く</small>あらし藤十郎 けいせい<small>う</small>きはし 中むらさきの八 ひたちの介女房浦菊<small>三く</small>中むらさきの八 こもそう道楽 山中 平十郎 やつこどた平 山中 平十郎 きした一かく<small>三く</small>山中 平十郎 やつこぐん介 小川 吉太郎 みやこの介久次<small>二く</small>小川 吉太郎 よど町御ぜん 山下 金作 おさき 久蔵 中むら 久蔵 きしだ兵部 浅尾 為十郎 小右衛門金十郎 中山 文七 もふりてるもと<small>二く</small>中山 文七 こうれつわう 中山 新九郎 よしつねぼこん 市山 助五郎 やつこはり介 市山 助五郎 与く 郎<small>聖三</small>市山 助五郎 右の外座中不残罷出申候</p>
<p>上るり 宮古路 一仲</p>	<p>狂言作者 根本 茂作 末広 与一 松屋 来ル 三味せん 豊沢 喜五郎 キ 宮古路菅夫太 上るり 宮古路 一仲</p>
<p>頭取 あらし藤十郎</p>	<p>千秋万歳 楽</p>
<p>板元 いみや又兵衛</p>	<p>明和五年二月十六日より</p>

けいせい桃山錦

やくしやかへなの次第

ちよくしへのさいしやく 中むら国次
 ちやうけいほろこん 中むらさきの八
 うまつらうもん 中山 与三郎
 いせ御師 はん東文五郎
 みしまかぬし 中むら国次
 大いきやうし 山下とら市
 ていしゆ徳右衛門 市のや吉五郎
 中居おおいわ 中むら松兵衛
 かふろかしく 山下乙吉
 だいごち茶平 山下とら市
 町しゆ与五兵へ ばん東平五郎
 はいら友そう 中むら 久蔵
 家ののぢい 柳山 伴蔵
 山家ののぢい 柳山 伴蔵
 むめ の 中山 花里
 さよめ 山下乙吉
 代官さから弥藤次二く 柳山 伴蔵
 ほろけんみちひろ 中村 国次
 ひたちの介妹いくよ 三升 徳次郎
 から菊妹とゆら二く 中むら松兵衛
 大つぼやかん次郎二く 中むら久蔵
 ごけいおいま 上村 竹五郎
 娘おつぎ二く 三升 徳次郎
 まつなみおりべ 生しま柏 木
 中居おおしな 中むら松よ
 やつこぐん介 中村 吉十郎
 やつこでち蔵 中村 吉十郎
 やつこ平馬三く 中村 吉十郎
 やつこがた兵へ 中村 吉十郎
 こにしじよせい 中むら松十郎
 まんざいとら又 浅尾 為十郎
 ましばぐんりやく三く 浅尾 為十郎
 しむらひたもの介 中むら松十郎
 さま五郎 中むら松十郎
 中居おりき 中むら喜世三
 明和五年二月十六日より

凡例

一、本番附は実践女子大学図書館所蔵の芝居番附（歌舞伎）のうち、先の報告に関係するもので、文中には〈参考1〉のかたちで表示してある。

一、これらの番附は、いずれも二枚組となっているが、役人替名を記載してある二枚目だけを紹介する。

一、番附のはじめに、外題、年月日、劇場を記した。

一、仮名は現行の字体に統一し、平仮名、片仮名の別は原文のままとした。

一、漢字はすべて新字体とし、特殊な草体、略体、合字、連字は対応する表記に改めた。

一、仮名遣はすべて原文のままに記してある。

一、原文は字体の大きさや太さが一定しないが、外題、名題と座本、役者名の上の解説以外の別は、すべて統一して記した。

一、虫損等により判読不可能の部分は□で記した。